第４章　史跡後瀬山城跡について

第１節　後瀬山城跡について

後瀬山城跡の所在する後瀬山は、小浜市街地の南西に位置し、海抜 168.53mとさほど高くないが、小浜湾から望む山容はきわめて秀麗である。後瀬山南東部は今富名の中心地域であり、古代から中世の一時期若狭の中心地として栄えた。そのため、多くの寺院・神社が所在する。この今富地区は、かつて潟湖のような状況を呈していたとが歴史地理学や考古学の研究成果から推定されている。元禄・宝永年間に成立したと考えられる「雲浜八景」の中で、津田の入江と称する地形が描かれており、その中で「津田落雁」とあることから、近世には陸化が進んでいたことが想定される。

この後瀬山の名は、古くは『万葉集』の坂上大嬢と大伴家持の贈答歌に詠まれ、その他数多くの歌人がこの山を詠んだ。

後瀬山城跡は、若狭武田氏５代元光により大永2年（1522）後瀬山上に城郭が築かれ、慶長５年（1600）の関ヶ原合戦の功績により翌年若狭に入部した京極高次が後瀬山城を廃し、雲浜の地に城郭（小浜城跡）を築くまで若狭国主の居城として機能した。

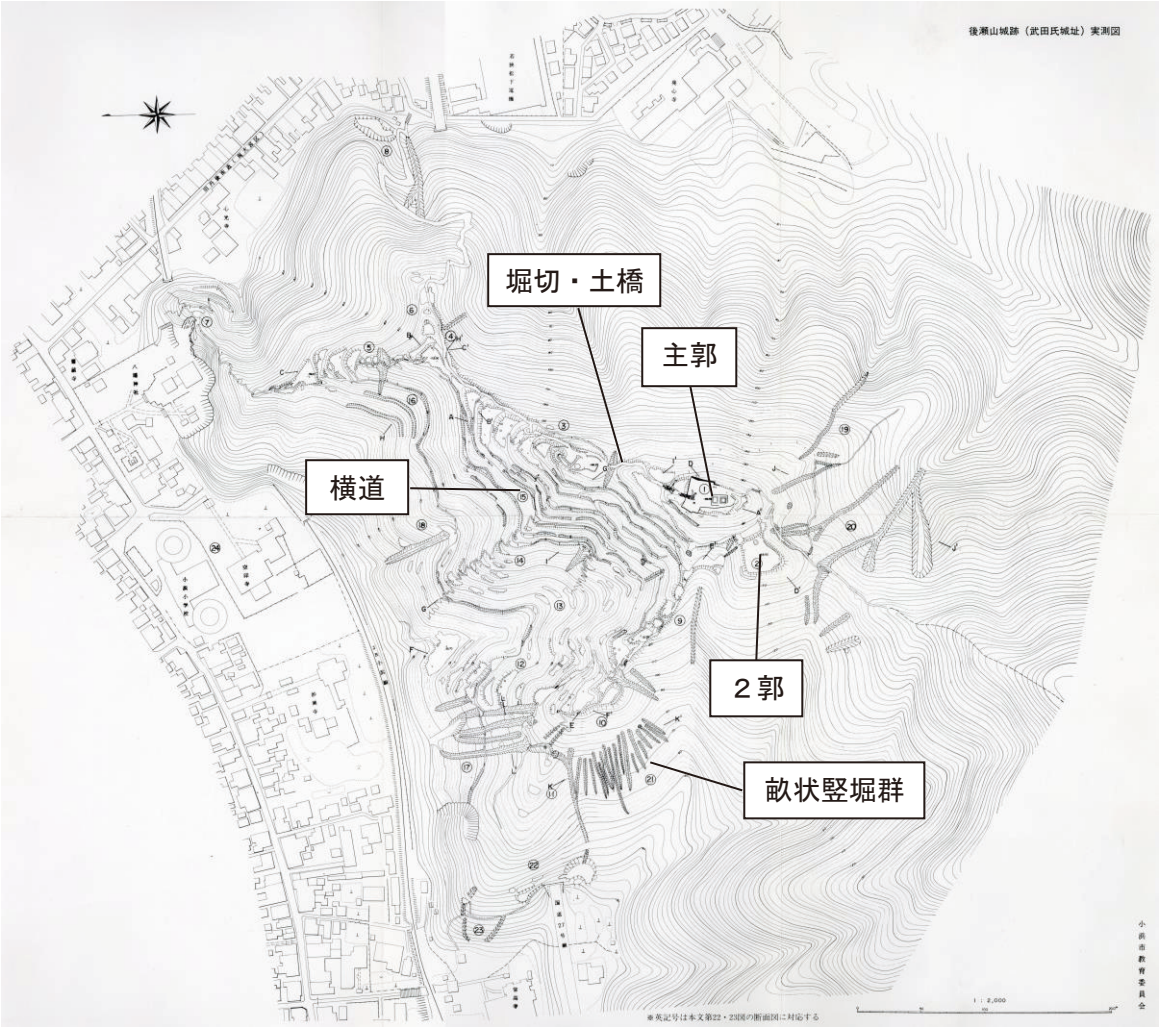
第２節　史跡後瀬山城跡の発掘調査成果

ここでは、後瀬山城跡の山城部分、山麓の守護居館の順に調査成果について述べる。なお、調査概要については第 10 表を参照いただきたい。

後瀬山城跡の調査は昭和 62・63 年度（1987・1988）に遺構の測量および一部発掘調査を実施して城郭の縄張り、建物跡の所在を明らかにした。昭和 62 年度の測量調査の結果、第８図のように当城跡は小浜市街地の南側・後瀬山山頂稜線と、西側斜面に遺構が多く残されていることが明らかになった。城跡は山頂に主郭を配し、それより北側に延びる主峰の稜線上に連郭をつくり、市街地に面する北西谷間には小郭とそれを連結する横道が多く造られている。また、主郭南側背後から西南・西斜面には壮大な竪堀・畝状竪堀群が配置され、北側山裾には堀を巡らせた守護居館が存在した。しかし、東側斜面には防備施設は見当たらず、山裾に見事な石垣を巡らせた発心寺が城壁の役割を果たしたものと推測される。城郭の範囲は南北 600m、東西 550mに及ぶ。各曲輪の名称は残されていないが、山頂主郭周辺は「御殿」と呼ばれていた。

後瀬山城跡の遺構（平場）は大小合わせて 139 箇所にあり、最高所から最下段郭までの比高差は 154.53mになる。『後瀬山城－若狭武田氏居城の調査－』では、1～24 のブロックに分けられている。

後瀬山城跡の発掘調査は２郭で実施した。２郭は主郭（標高 168m）の西南に位置し、主郭とは幅 20mの堀切を介在する。主郭に匹敵する広い平坦面（標高 158m）は不整台形状を



第８図　後瀬山城跡縄張図（『後瀬山城跡－若狭武田氏居城の調査－』より）

呈する。検出遺構には第 10 図～第 12 図のように礎石建物とこれに伴う玄関、土塁、築山、不正形土坑2 基等がある。これらの遺構は築山を除いて各々2 時期あり、それぞれが対応して 2 郭全体を 2 期に時期区分することが可能である。また、郭縁辺部の断ち割りによって削平土砂による郭の拡張も確認した。2 郭は尾根頂部を削平することによって平坦面を得るとともに、削り出された土砂を周辺斜面に出し、何層にもわたって突き固めながら積み上げ、より広い平坦面を造成している。

遺物は 2 郭にある場所に集中するような事はなく、ほとんどが郭の南部に散在していた。遺物の種類は陶磁器では青磁・白磁・染付・瀬戸美濃焼・備前焼・丹波焼など、瓦では丸瓦・平瓦、金属製品では銅銭・釘などがある。

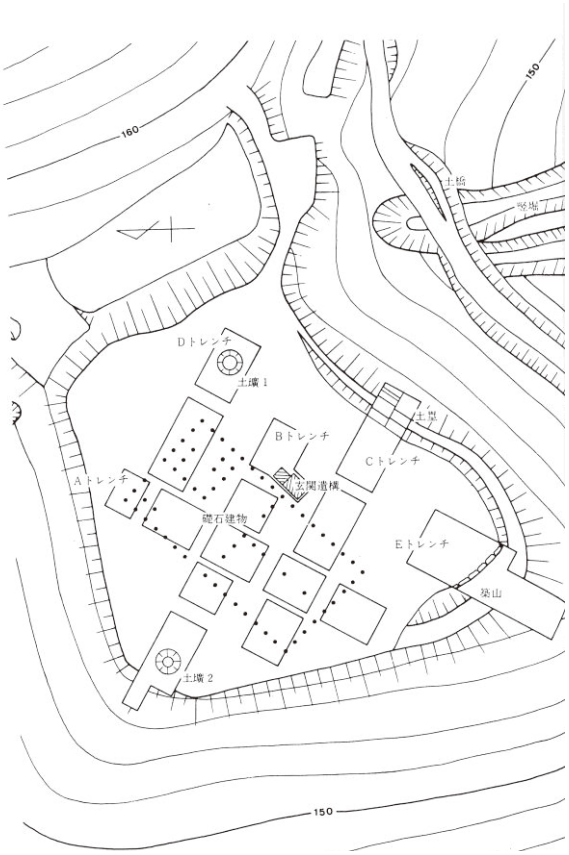
これら遺物の年代観から後瀬山城跡 2 郭の所属時期は、土師皿や陶磁器より 16 世紀後半以降に比定することができる。その中で瓦に着目すると、『摂津高槻城　本丸跡発掘調査報告書』

第９図　後瀬山城跡出土瓦（コビキＢ）

によれば、コビキBの出現は天正11年（1583）頃であるとされる。後瀬山城跡でみられた丸瓦が第9図矢印のようにすべてコビキBである以上、転用とはいえ伴った平瓦もその年代にあるものと考えられる。そうすると、平瓦が玄関敷石1の修繕に利用されていることで第Ⅰ期遺構存続年代の1点は1583年以降1600年（廃城）までにあり、第2期遺構の存在期間はきわめて短いと考えられる。

丸瓦の時期を限定すれば、天正11年（1583）を上らない時期に第1期の補修が実施されたと推定される。しかし、後瀬山城跡は天正10年（1582）の段階で大補修が行われており、柴田勝家（しばたかついえ）と確執のあった羽柴秀吉方北国警備の城として当山城跡は存在したことが判明している。このことから天正期に何らかの構造改築が実施されたことは確実で、丹羽長秀（にわながひで）もしくは天正15年（1587）丹羽氏に替わって若狭へ入部した浅野長吉（あさのながよし）が改築したとの見方もできる。

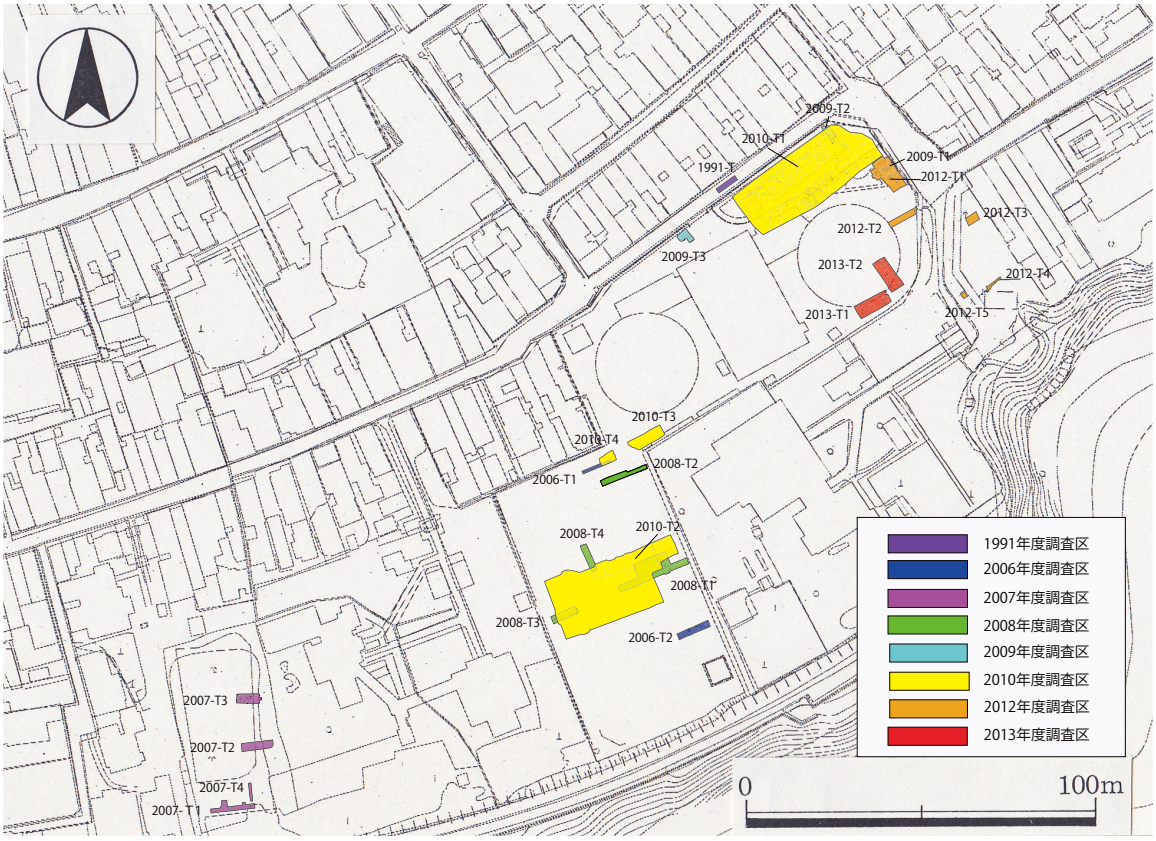
山麓の守護居館跡の調査は、第13図のように平成3年度（1991）に下水道敷設工事に伴う確認調査が実施された以降本格化する。調査は市道に延長7m×幅2mの調査区を設けて実施した。その結果、調査区北壁に焼土層等の積層が、そして南壁に石垣が確認された。北壁の焼土層の状態からこの地点は、最低3回の延焼があったと考えられる。また南壁の石垣については、当初は石垣の表に見える石と推定していたが、その後の調査によって石垣の裏側であったことが判明した。これらのことから、この石垣は館前



第１０図　２郭遺構図

第１１図　２郭礎石建物跡

第１２図　２郭築山遺構
（『後瀬山城跡－若狭武田氏居城の調査』より）



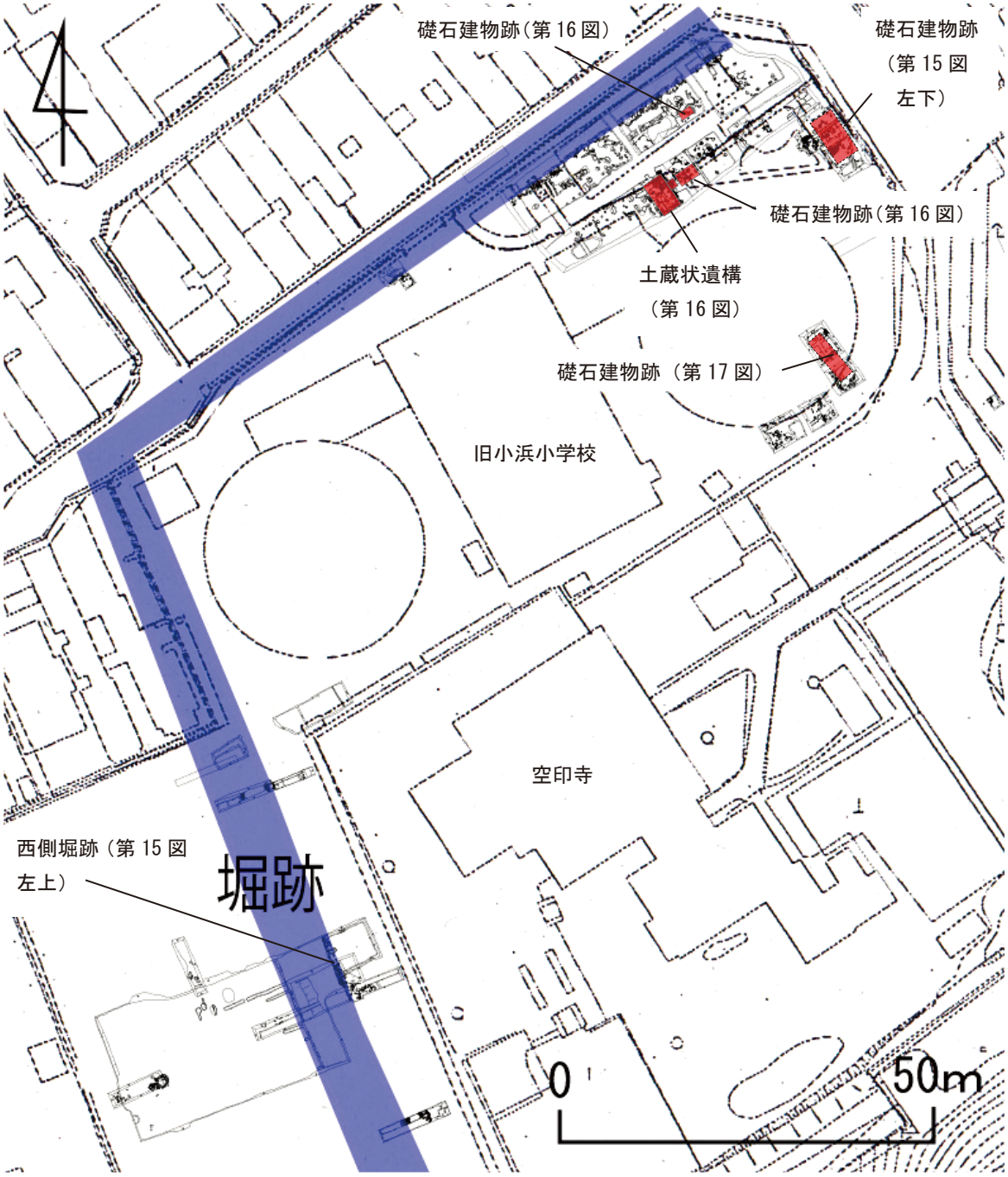
第１３図　守護居館跡調査位置図

に存在していた堀跡（北側堀）に伴うものと考えられる。

守護居館跡の本格的な調査は第 13 図のように、平成 18 年度から実施している。平成 20 年度調査では第 15 図左上のように、守護居館西側堀跡を確認している。堀幅は約 5.2mを測り、深さは現地表から堀底まで約 2.8mを測る。石垣は大型石材を 5 段分積んでいるのを確認している。なお、堀跡の堆積は粘土と砂が主体であり、湧水も認められることから常時水をたたえていたと考えられる。

平成 21 年度調査では、石垣天端を海抜 3m付近で確認しており、ここから下には粘土が堆積しており、裏込めを施している。石材は 4 段分を確認しており、堀底から 3 段目までは長軸を東西にして据えているが、4 段目のみ長軸を南北にして据えている。

平成 22 年度調査では、第 14 図や第 15 図右上・右下のように、2010-T1 で守護居館の北側を画す堀、土塁、土蔵状遺構、礎石建物、掘立柱建物、柵、土坑、小穴などの遺構を検出している。土塁は西壁土層で痕跡を確認した。土蔵状遺構は主軸を南北にとっている。長軸 5.8m×短軸 3.8mの方形プランを持ち、東側に長軸 1m×短軸 0.5mの突出部を持つ大型の河原石を方形に敷いて、その中に小型の石材を敷き詰めている。この方形石列は建物の土台とみられる。遺構の境には平瓦を地面に突き刺すとともに、河原石より小型の石材を巡らせている。この土蔵状遺構は端谷城跡や高屋城跡、堺環濠都市遺跡などで検出されているものに類似している。検出遺構は主軸の振れやレベルなどから 2～3 時期に分けることがで



第１４図　守護居館跡遺構図

きる。なお、平成 20 年度の調査では明らかにできなかったが、旧小浜小学校グラウンド調査区で西側堀跡の妙興寺側堀に 1 段だけ石材を据えていることを確認している。

平成 24 年度では、第 14 図や第 15 図左下のように 2012-T1 で南北に主軸をもつ礎石建物跡を検出している。小型の石材を敷設しており、その上に粘土を敷いている。

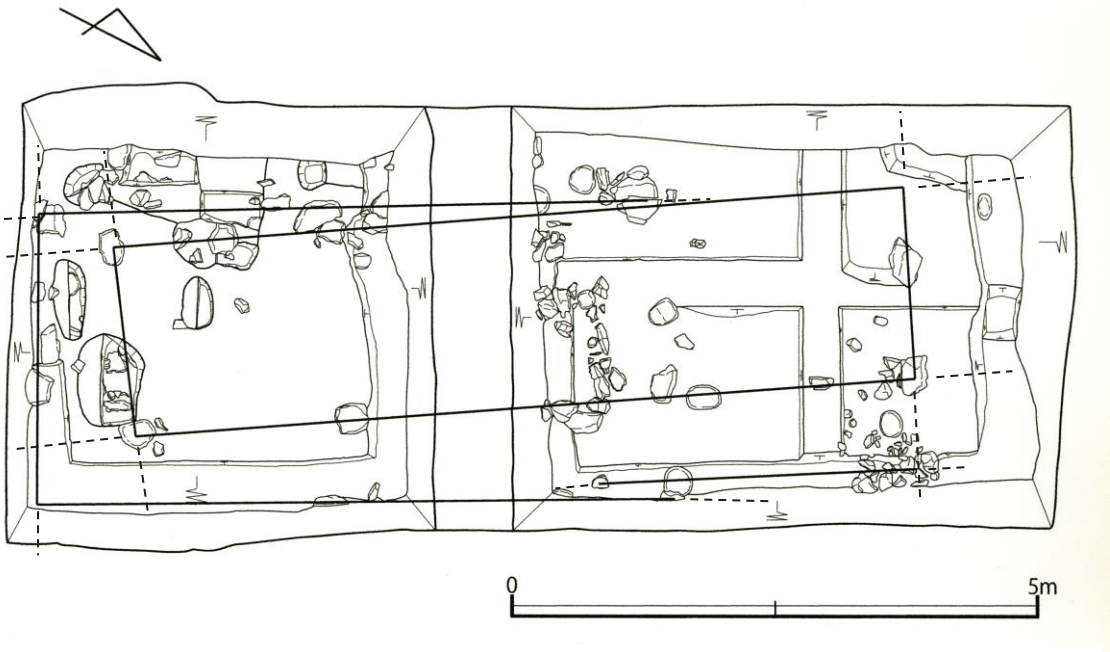
平成 25 年度調査では第 14 図のように 2013-T1 で海抜 2.3m 付近から溝、土坑、小穴の遺構を検出している。また、海抜 2.0m付近で下層遺構を検出し、建物礎石と溝、小穴を確認している。2013-T2 では第 16 図のように、南北に主軸をもつ礎石建物跡を検出している。2

第１０表　後瀬山城跡調査概要

調査年度	調　査　概　要
1987（昭和 62）	後瀬山の測量調査を実施。
1988（昭和 63）	2 郭の発掘調査を実施、礎石建物、土塁、築山などの遺構を検出。
1991（平成 3）	旧小浜小学校北側の市道部分の調査で堀跡を確認。
2006（平成 18）	T１で堀跡の守護居館側に石を積んで石垣としているのを確認。
2007（平成 19）	家臣の屋敷地として使用されていた可能性があるため確認調査を実施したが、近世から現代の遺構・遺物を確認したに留まる。
2008（平成 20）	T1 と T2 で西側堀跡を確認している。T1 は堀幅約 5.2mを測り、大型石材を 5 段分積んでいる。
2009（平成 21）	T2 と T3 で北側堀跡を確認している。T2 は石材を 4 段分確認。
2010（平成 22）	T1 で北側堀跡、土塁、土蔵状遺構、礎石建物、掘立柱建物、柵、土坑、小穴などを確認。
2012（平成 24）	T1 で南北に主軸をもつ礎石建物を確認している。小型の石材を敷設しており、その上に粘土を敷いている。
2013（平成 25）	T1 で海抜 2.3m 付近から溝、土坑、小穴を確認している。また、海抜 2.0m付近で建物礎石と溝、小穴など下層遺構を確認。T2 では南北に主軸をもつ礎石建物跡が検出されており、2 間×3 間の建物プランで方形の石組み遺構を伴う。

第１５図　守護居館跡　西側堀跡・北側堀跡・礎石建物跡・土蔵状遺構

第１６図　守護居館跡　土蔵状遺構（２０１０－Ｔ１）平面図



第１７図　守護居館跡　礎石建物跡（２０１３－Ｔ２）平面図

間×3 間の建物プランで、方形の石組み遺構を伴う。また、主軸とレベルの異なる建物プランが確認されており、複数時期の建替えが想定される。

出土遺物として土師質土器、越前焼、信楽焼、備前焼、珠洲焼、瓦質（かわらしつ）土器、瀬戸美濃焼、肥前焼、白磁、青磁、朝鮮、染付等の陶磁器、硯や石臼等の石製品、小札（こざね）、銭貨等の金属製品がある。

これまでの調査で守護居館跡については、西側と北側に堀跡を巡らせていることが明らかになっている。居住スペースについては今後の調査結果により変更される可能はあるが、現時点での見通しについて述べておきたい。

まず建物は礎石建物跡と掘立柱建物跡の両者が確認されており、建物プランが判然としないものも多いが、礎石建物跡は屋敷地の地割に軸を合わせたように建てられていることが窺える。また、平成 22 年度調査で検出された土蔵状遺構は主軸を東西にとり東側に入口をもつもので、石の外側に瓦を地面に挿し込んでいる。被熱により赤化している部分もあり、土蔵状建物と考えたい。このように旧小浜小学校跡地については未だ不明な部分が多いが、宗教法人空印寺境内に守護居館の中枢があると捉えると、旧小浜小学校跡地で確認されている建物跡は、館を維持する上で必要な施設であった可能性が考えられる。堀跡については、北・西側で幅約 5m分を確認しているが、東側については未だ確認できていない。北側堀跡は両岸とも石を積んで石垣としているが、西側堀跡は守護居館側は石を積んで石垣としているおり、対岸（妙興寺側）には海抜 1.5m付近で石を 1 段だけ疎らに並べていることが明らかになっている。

遺物の特徴等から 14 世紀から当地での活動が活発化していることが考えられ、15 世紀になるとさらに出土遺物が増加する。武田元光が守護居館を建設するまで日蓮宗長源寺が所在

していたが、この長源寺の創立は康暦(こうりゃく)2 年（1380）であることから、14 世紀～15 世紀の遺物の多くは長源寺が活動していた時期のものと捉えることもできる。そして大永 2 年（1522）元光がこの地に守護居館を築いてから丹羽長秀が若狭へ入部する天正(てんしょう)元年（1573）までの時期が武田氏に関わる時期の遺物と考えられる。そして丹羽氏から木下氏までの時期が守護居館として最後の時期と捉えることができる。その後京極氏・酒井氏の治世となりこの地は寺院として利用されるようになる。以上のことから、守護居館跡は以下のように整理できる。

①古代から中世前半の遺物が僅かながら認められる時期で小浜の黎明期
②日蓮宗長源寺が所在していた時期で大永 2 年（1522）までの間
③守護居館として利用される時期で大永 2 年（1522）～慶長 6 年（1601）までの間
④守護居館ののち、寺院として利用される時期

第１８図　史跡後瀬山城跡出土 瀬戸美濃焼・染付・瓦質土器